

地域振興部門

東京都練馬区

小泉牧場とその仲間たち

(代表：小泉 勝)

一粒万倍の機能を持つ、教育・福祉資源としての大都市ど真ん中酪農

— そのとき、牧場が教室になる —



左から小泉與七さん、勝さん、横山弘美、新井淑子両教諭

東京都練馬区の住宅街の中心にある「小泉牧場」。経営主は父の與七（よしち）さんだが、現在、飼養管理全般は後継者である長男の勝（まさる）さんが行っている。また、勝さんは東京都の福祉事業の一環として障害者を受け入れており、勝さんをサポートしながら労働力の一翼を担っている。

同牧場の平成 20 年度飼養頭数は約 40 頭、うち経産牛は約 30 頭で、年間生乳生産量は 270 t、経産牛 1 頭当たり平均乳量は 9,300kg(乳検成績)と高水準だ。本州では育成(更新)牛を購入に頼っている酪農経営が多い中であって、ここでは自家育成による更新を行い、全頭牛群検定を実施するなど、酪農に対する経営管理、飼養管理・生産技術、先見性が三拍子揃った経営である。

同牧場の特徴は、周囲の宅地化が進み、厳しい酪農経営環境の中で「酪農専業経営」を維持・発展させて、地元の大泉小学校の児童らを中心にオープンファームとして活動している点である。その取り組み内容を紹介すると――

同牧場と大泉小学校の児童たちとの交流の始まりは、平成 13 年度から。大泉小学校の 3 年生が、総合的な学習の時間として同牧場を第 2 の教室、学びの場として活用しているのである。

総合学習の活動に加えて、生乳生産の場であることを理解するために、夕方の搾乳作業見学会を開催している。搾乳や掃除をしている酪農家の姿を親子で見学させることで、児童らは成牛や子牛、搾られる乳はもちろん、働く姿そのものに引きつけられ、学習意欲をもち、「やってみたいこと」「知りたいこと」がたくさんあふれてくる。

先日、大泉小学校では、児童たちによる学習発表会、「小泉牧場ふしぎ大発見！」が行われた。

これは、1 年間牧場に通った児童たちが、体験してきたことや調べてきたことをまとめて発表したもので、それぞれ工夫をこらしたものが登場。発表会の最後には、小泉與七さんへの感謝の言葉も贈られ、小泉さんは「これだから酪農はやめられない」と目頭を熱くしていた。

平成 14 年度から、毎年夏期休業を利用して、牧場理解を目的にした教員のための研修会としての畜産体験を数回設定している。担任の先生が牧場を理解していないと、学習も進められず、牧場にも大きな負担となる可能性があるという理由からである。教諭のほか、栄養士、給食主事などを対象にした研修会を定期的に開催していることは注目される。

さらに、酪農に対する理解を深めてもらい都市農業の振興を図ることを目的に、練馬区民を対象とした酪農体験事業を実施している。毎年、定員 90 人に対し、1.5～2 倍近い数の応募があり、区民の関心も高いものとなっている。

また、平成 12 年から、東京都の精神障害者社会適応訓練事業の一環として、作業員として患者の受け入れを開始。現在まで約 15 人の受け入れを行っている。加えて平成 17 年から、(財)東京しごと財団の障害者委託訓練事業の事業所として、知的障害者の受け入れも開始し、これまで延べ 11 人を受け入れた。

「自分たちの酪農経営のすべてを見せる」という同牧場のオープンファーム活動は、大泉小学校の児童だけでなく、保護者、地域の人々との接点が広がっていった。その結果、牧場に対する苦情が減少し、地域の理解が広がっていったのである。このように、同牧場は地域の人々の理解と支援を受けて、持続的な酪農経営の方向性が見いだせるようになったことは特筆される。

活動のようす



▲住宅街の真ん中にある小泉牧場



▲チーム ミルクルのメンバー



▲小学校の授業で話をする與七さん



▲搾乳体験



▲小学生の質問にていねいに答える勝さん



▲毎年2月に父兄を招いて行われる3年生による総合学習の発表会